「事実」の推定をめぐって

宮城教育大学学長　高橋　孝助

昨年末、大学時代の恩師のＹ先生から曹樹基著『大饑荒―1959―1961年的中国人口―』（時代国際出版、2005年６月）という本を頂戴した。恩師は、「業界」では国際関係論の草分け的研究者で、特に米中関係論の専門家として著名な方であり、70歳を越えた今もなお「若い研究者」と一緒に健筆をふるっておられる。この本を送ってくれた趣旨は、２年前に私が著した『飢饉と救済の社会史』に対するＹ先生らしい批評であるとおもわれる。つまり「水準の高い研究書をしっかりと読め（読んだのか）」という趣旨であり、その書が曹氏のものであるとおもわれるのである。実際拙著に付けた「文献一覧」には曹氏の著作は『中国人口史』の第５巻《清時期》（復旦大学出版社、2001年）だけしか掲載しておらず、上記の著作は欠いている。拙著は2006年２月刊行であるから、執筆の時期にはまだ日本では入手していなかったのだとおもうが、今でも私の手元にはないから、あるいは日本では入手できないか、カタログを見落としたかのどちらかであろう。いずれにしろ、私の怠慢であるから、恥ずかしさを感じるとともに、一方では恩師の配慮をうれしくおもった。

1959―1961年は「大躍進」期と言われ、「三分は天災、七分は人災」という「災難」あるいは「大饑荒」に苦しめられた時期であったが、曹氏の著書はこの時期の「非正常死亡人口」に関する研究である。中国政府からはこの３年間の「非正常死亡人口」数についていまだに公式の発表はないが、日本の研究者は最低でも1300万人と推定しているものもあるほど、史上空前の「非正常死亡」が生じた時期である。しかし、「非正常死亡人口」に関する当該時期の統計的資料には誤報があったり、改ざんや隠蔽があって信用できない、したがってこの時期の事実を明らかにするには、何らかの方法を考えねばならないというのが実情である。根拠とすべき資料に信憑性がないときにどうするか。曹氏が考え出した方法は、自然条件が同じで大規模な自然災害や社会的動乱を経験したことのない地域の人口変動を明らかにし、自然災害や社会的動乱動を経験した地域の人口変動を推定しようというものである。さらに科学的調査と公認されている1953、1964、1982年の全国人口調査のデータを用いて、30年間の各地の人口変動を明らかにするのであるが、その場合新中国後に行政区画の調整・変化が著しく、清代の「府」をもって基準として地域を特定するという方法をとっている。こうして、1990年代に入って刊行が始まった2000種以上およぶ『地方誌』の《人口志》に載る数字について、災害前の自然増加率と災害後のそれとを用いて、災害時（59―61年）の「非正常死亡人口数」を推定するのである。こうして幾つかの「非正常死亡人口」の例が導き出され、被災地域が概観される。曹氏のこうした方法が歴史学の方法としてどう評価されているかは今のところは分からないが、私は一つ一つの事実の確認とはこのような努力を必要とするという意味で肝に銘じたいとおもっている。それは、事実に基づいて帰納的方法でものごとを推定・判断するとき、その事実そのものがどんなものであるかを判断する方法にかかわっていると読んだからである。

今日、「事実に基づいて評価をする」という「評価文化」に直面している我々にとって、その事実そのものがどのように特定できるのか、その方法は一つなのかどうか、悩ましいのである。

（2008.3.13記）